

## 序



北海道立道南農業試験場は、明治42年（1909）7月、北海道庁立渡島農事試験場として現在の北斗市（旧亀田郡大野村）に第一歩を標し、シンボルツリーである巨木「ユリノキ」に見守られながら、本年で100年の節目を迎えました。

永きにわたり、渡島・檜山地域の農業関係者の皆様などからの多大なるご支援とご協力をいただき、今日を迎えることができましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

北海道農業発祥の地である道南は、古くから農業が営まれ、先人のご努力により、今日、温暖な気候を活用した園芸や稲作、畑作、畜産など多様な農業を展開する地域として発展してまいりました。

こうした中であって、道南農業試験場は、創設当初の模範果樹園の設置に始まり、園芸作物などの栽培技術の開発や世代促進温室を活用した水稻の品種育成といった試験研究を手がけ、水稻「ふっくりんこ」やいちご「けんたろう」などの優良品種の育成をはじめ、いちごの高設栽培など地域課題に即した多くの品種や技術を世に送り出し、道南農業の発展、ひいては地域経済の発展に大きく貢献してきました。

今、世界経済の激動が、本道の経済活動や道民の暮らしに大きな影響を及ぼし、農業においても肥料をはじめとする生産資材や穀物の価格高騰などにより、農業経営をめぐる状況は大変厳しいものとなっています。

しかし一方では、国際的に安定的な食料供給が不安視されるとともに、「食」の安全・安心に対する関心の高まりなどから、我が国最大の食料供給地域である本道農業・農村の役割に大きな期待が寄せられています。

今後とも本道の農業・農村が持続的に発展していくためには、北海道の恵まれた農地や水といった資源を最大限に活かし、クリーン農業や有機農業などによる安全・安心で良質な農畜産物の生産を着実に進めていくとともに、地場の農産物を活用した付加価値の高い食づくりに取り組んでいくことが重要であり、道立農業試験場としては新品種の育成や環境保全型の農業技術の開発といった試験研究を一層推進していく必要があるものと考えています。

このたびの、道南農業試験場の創立100周年記念誌の発刊にあたり、輝かしい成果を積み上げてこられました先人の皆様のご労苦を心から讃えますとともに、一世紀の間に培われた貴重な技術の蓄積を活かし、新しい技術開発に挑戦しながら、本道農業のさらなる発展に貢献していくことができるよう、これからも努力してまいります。

平成21年7月

北海道知事 高橋 はるみ

## 発刊のことば



明治42年(1909) 7月に北海道庁立渡島農事試験場がここ北斗市(旧亀田郡大野村)に開庁して以来、北海道農事試験場渡島支場、北海道農業試験場渡島支場、北海道立農業試験場渡島支場を経て、昭和39年(1964)に北海道立道南農業試験場と改称し、現在に至るまで100年の歳月が経過しました。

これまで当場の運営に対する関係各位のご協力、ご支援に深謝するとともに、100年の業績を築き上げた多くの先輩職員、臨時職員の皆様の真摯な取り組みとご苦勞に対し、ここに深く感謝申し上げます。

この節目にあたり、当場が長期間営々として積み重ねてきた研究の成果を記録に止め、今後の研究発展の礎石として100周年記念誌を刊行することにしました。当場は既に①「北海道立道南農業試験場70年史」及び「試験研究成果集―施設園芸研究を中心として―」、②「創立80周年記念 最近の試験研究成果」、③「道南農試の研究成果―最近5年間の成果とこれからの研究方向―」、④「創立90周年記念 最近の研究成果とこれからの道南農試」を刊行しておりますので、これらとできるだけ重複しないよう100年の歩みを集約して編集することにしました。

昨今の原油高騰や化石エネルギー代替の変換資源としての穀物投入に端を発した世界的な食糧不足や資材・原料の争奪戦等が顕現化し、肥料・飼料をはじめ生産資材類の国内価格が高騰して我が国の農業生産に大きく影響を及ぼしてきています。今後、農業の持続的な発展とともに食糧の確保・安定供給するためには、より一層、基本技術に立ち戻ることの重要性が再確認させられ、道南農業試験場に対する期待と役割もますます高まってくると確信しています。これからも新たな農業技術の開発・改良をはじめ試験研究情報を速やかに発信するとともに農業者や消費者の声に耳を傾け地域課題の解決に取り組み道南圏地域農業の発展に貢献できるよう努力してまいります。

結びに当たり、渡島・檜山地方の関係機関各位から道南農業試験場に寄せられましたこれまでのご支援とご協力に対し深謝するとともに、本誌の編集、執筆にあたった職員各位の労に心から謝意を表し発刊のことばといたします。

平成21年7月

北海道立道南農業試験場 場長 桃野 寛